技能バランスと正確性
～トップ層の持つ英語力から見える課題～

駒橋　輝圭

1．はじめに

現在私は，主に東京大学を志望する高校生および帰国子女と共に学んでいますが，職歴のほぼ全ての期間，教育産業の1つである予備校という場で，高校英語指導および大学入試英語の対策指導に携わってきました．共に学んできた学生は，主に，東京大学をはじめとするいわゆる「旧帝大」，国公立医学部，最難関私立大学を志願する高校生と大学受験生です．本稿では，そのような立場で英語教育に携わってきた私の考える，トップ層の高校生・大学受験生の英語力に関する課題意識を，大学入試英語試験の現状と関連させて共有していきたいと思います．

2．現状の英語学習について

現在，全国の中学・高校で実施されている英語教育は多岐にわたることが想像され，一概に「ここにこういった問題点がある」と言うことはできないでしょう．一方で，私が共に学んでいる学生たちが通う高校では，大別して2種類の教育が行われていることが学生との会話から想像されます．1つは難関大学入試突破を目標にした，従来型の教育です．この種の教育では，ご存知の通り英文解釈(場合によっては訳読法)や，文法の理解を優先した教育が行われ，知識の定着は，主に学校専売または市販の問題集に取り組むことによって目指されます．もう片方は，原則として英語で授業を行い，ディベートやスピーチなどの活動を中心とした，実用能力を養うことを主眼においた授業です．私が共に学ぶ学生たちに限って言えば，前者のタイプの教育を受けている学生の方が多いという印象です．便宜上，本稿では前者を大学受験適応型，後者を実用能力重視型の教育と呼びたいと思います．

3．難関大学への入学者の英語力

難関大に入学する時点で学生が持っている英語力についても，実際には個人差が大きくあり，あくまで傾向として述べることしかできませんが，提供されている英語教育の課題点，改善案を考えるという目的のため，集団の傾向として私が観察していることをここにまとめます．乱暴に響くことを覚悟の上で，学生たち自身の言葉も借りて端的に言うならば，大学受験適応型の教育を受けてきた学生は「知識・読解偏重の英語力」を身につけ，実用能力重視型の教育を受けてきた学生は「バランスは比較的良いが，大雑把にしか使えない英語力を『なんとなく』学んで身につける」傾向があると言えます．

大学受験適応型の教育を受けてきた学生については，従来からよく言われる通り，読解力偏重の英語力を持つ傾向があります．うまく力を養成できた学生は，複雑な構造を持つ英文を正しく理解でき，文章全体の内容も掴めます．受験大学および学生の努力によっては，同年齢の聡明な英語母語話者に劣らぬ語彙力を身につける学生もいます．一方で，ほとんどの学生は，その読解力と比べて聴解力はずっと低く，同じ文章でも読むのであれば解像度高く理解できたとしても，聴く場合には断片的な情報しか掴めないのが普通です．そして，聴解力よりも一層低いのが，発信の2技能であるライティング力とスピーキング力です．スピーキングについては，大学入試での出題がないため仕方のない部分も大きいでしょうが，驚くべきは，ライティング力が非常に低く，単文を正しく書くことから文章を書くことに至る全てのレベルにおいて，能力が養えていない学生が非常に多いということです．

一方で，実用能力重視型の教育を受けてきた学生については，バランスという点では大学受験適応型の教育を受けてきた学生よりも良い傾向があるものの，全技能の正確性が低く，結果として読解偏重の出題をする大多数の大学を受験する際には苦戦しやすく，合格したとしても英語の技能の正確性は低い

まま入学するという傾向があります．具体的には，受信技能(読む・聴く)については「なんとなくこんなことを述べている」ということは分かっても，正確にどう述べられているかまでは分からず，発信技能(書く・話す)については，臆せず発信はできるものの，文法・表現ともに誤りが少なからず含まれた英語になっていることが多いです．

４．課題意識

「日本人は英語ができない」という言説はよく耳にするものですが，これも具体的には様々な意味で用いられているように思われます．たとえば，訪日観光客がサービス提供を受けたり，街で道を尋ねたりする際に英語が通じないという経験をし，結果的に「日本人は英語ができない」という意見を持つことが考えられます．しかしこれに関しては，私の経験上，非英語圏の他の国にも大なり小なり当てはまることで，程度の問題にすぎないと考えます．そしてどちらにせよ，まもなくテクノロジーの進歩により，これは解消されることでしょう．一方で，私が共に学ぶような学生たちの多くは，その場が学問の世界であれビジネスの世界であれ，政治の世界であれ，世界言語としての英語を使いこなし，正確性の高い的確なコミュニケーションを取ることがやがて必要となります．残念ながらそのようなレベルにおいても，「日本人は英語ができない」と思われがちであり，その評価は間違っていないと考えます(このレベルでの「日本人は英語ができない」という問題もテクノロジーの進歩により完全に解消されるかもしれませんが，その場合は英語教育自体が必須でなくなるため，それは考えないこととします)．この低評価の理由は，洗練度の高い内容に関して正確性の高いコミュニケーションを取るには 4 技能全てを高いレベルで有していることが必須であるのに，読解力以外の技能が低いまま実践にあたっているからです．他国の人たちと比べても，英語に関する文法や構文，語源などの知識は大学入学時点で断然多く有しており，*TIME* や *The Economist* などの記事を読んで内容を理解することができる反面，聴く，書く，話すことを正確にできる能力は非常に低いままでいる．これを改善することが私の考える日本における英語学習・英語教育の課題です．

たしかに，実用能力重視型の教育によって，すでにこの課題に対する改善が目指されていることは間違いないですし，その集合的努力は称賛に値しますが，残念ながら学生が身につける英語力の正確性は非常に低く，厳しい言い方をすれば，「自信を持って情報を大雑把に受信し，誤った英語で発信している」というのが現状だと感じられます．真の問題は，技能間のバランスだけでなく，その正確性にもあるのです．

５．複雑な現状

これまで述べてきたことに対して，「悪いのは大学入試で，入試が変わらないと日本人の英語力は変わらない」という意見や，それとは真逆で「受験英語は基礎を作るのに役立つもので，話す力は大学以降で身につければよい」という意見を目にします．前者に関しては，確かに試験の変更による波及効果が意識・行動レベルで存在することは間違いないようですが，それが実際の学習改善や能力向上につながるかどうかは証明も反証もされていないようです．実際に，センター試験が共通テストに変わった段階で，東京大学を目指すのであれば，(東大にはリスニングセクションを改善してほしいという個人的な気持ちはありますが)純粋に英語運用能力を高めることが最善の策となったにもかかわらず，塾・予備校などで提供される英語教育といえば，「センター試験対策(講座)」が「共通テスト対策(講座)」に変わっただけといっても過言ではありません．また，「東大入試を TOEFL や IELTS に変えるべきだ」といった極論を目にすることもありますが，大学入試は各大学が求める人材を選別する目的で作成されるものなので，部外者が具体的にどういう試験にすべきかと論じることは的を射たものではないと考えます．

後者に関しては，確かに受験英語で学ぶ内容自体は英語の基礎力の形成に役立つものであることに疑いはないですが，一方で，先述の通り知識偏重，読解偏重となってしまうことに加えて，たとえば文法の正誤問題，整序英作文，適語選択，長文の空所補充問題など，実際の英語運用とは無関係の試験対策に過度に多くの時間が割かれてしまっていることも事実です．また，職業で英語を使うことを想定している人にとっては，大学以降になってようやく本格的に話す訓練をするというのでは遅すぎると個人的

には思います．職業に関わる専門分野で研鑽を積むべき時期に英語学習に多くの時間を割かれてしまうのは大きな損失ではないでしょうか．

6．改善を目指した個人的取り組み

私は予備校や自身の運営するオンライン塾などの教育産業に身を置き続けていますが，この立場にいて私が常に意識しているのは，学校教育との補完関係です．高校生たちが英語学習に最も多くの時間を費やすのは学校教育においてであり，塾や予備校での教育は，学校での学習内容がより効果的に身について力になる一助となることが最善と考えています．

先述の通り，私が共に学ぶ学生たちは大別して大学受験適応型の教育か実用能力重視型の教育のどちらかを受けているので，双方の課題と私が考えることを少しでも解消することを目指して教育を構築しています．

大学受験適応型の教育がもたらす課題点は，先述のとおり，知識，読解力偏重の英語力となってしまうことです．これを解消するには，もちろん聴く，書く，話す活動を増やすことが必要ですが，それだけでは十分ではなく，これまで構築されてきた英文法の説明体系を見直す必要もあります．文法習得には，母語による明示的な説明が効果的であると分かっていますが，現在の日本の英語教育で一般的な文法説明は，正しく読めるための説明になっています．たとえば，現在完了を習得する際に，多くの学生が完了・結果・継続・経験といったものが現在完了の定義であるかのように誤解します．これらはあくまで現在完了を用いた文が動詞の意味によって持ちうる意味合いを表したものであり，現在完了の定義ではないのですが，正しく読むことのみを念頭においた説明を受けるとこのような誤解が生じがちになります．現在完了は「過去の出来事が今に関連していることを述べるものである」という，発信ベースの説明を明確に行えば，「過去を明示する語句と共に現在完了を使うことはできない」のは至極当然となり，結果的に正しく使えるようになります．このように，文法説明は発信ベースのものを中心にし，演習問題を通じて実際に書けるようになって初めてその文法事項を習得した，という考え方を徹底するようにしています．これに加え，英米訛りの音声の特徴を説明し，ディクテーションを通じた音声理解を深める活動をするとともに，英語を直接理解する受信法を提示し，実践演習を積むことにより，聴解力が読解力と極力同じ水準に近づくような教育を心がけています．スピーキングに関しては，時間の制限により本格的なことは行っておりませんが，高校１，２年生には（聴解力養成にも直結するため）発音指導を行うことと，ライティングで身につけた事項をターゲット表現にしたロールプレイを行うことはあります．

実用能力重視型の教育がもたらす課題点は，何と言っても正確性の低さにあります．これは，前段で示した教育内容によって改善が見込めるのですが，ここで要となるのが，理解してもらえる形で説明を行うことです．実用能力重視型の教育では文法説明が明示的に行われていないことも少なからずあり，そのような学生相手に予備校で標準的に使われている用語を用いて説明してしまうと理解してもらえないことも少なくありません．そこで，用語は必要最小限のものに絞り込み，使う用語は定義を明確にし，必ず実例を用いた説明をすることで，英語のルールや仕組み自体を理解してもらえるよう心がけています．

もう１つ重視していることは，誤った表現に極力触れさせないようにすることです．認知バイアスにより，人間は誤った表現でも正しいものとしてインプットしてしまいます．学生に受けが良いからといって，「学生はこんな間違いをしがち」といった例を英語のフレーズや文の形で見せることは決してしないように心がけています．

7．最後に

細部に気を配った地道な作業を通じてこそ学生の英語力に改善をもたらすことができるとの思いで，日々の業務に取り組んでおります．本稿に少しでも参考になる内容があれば幸いです．

（東進東大特進，駿台国際教育センター英語講師）